

Frankenstein にみる家族の「おぞましさ」

中 村 晴 香

1. はじめに

Frankenstein ; or, the Modern Prometheus は1818年、Mary Shelley がわずか19歳の時に書いた怪奇小説である。作者自身の稀有な人生とその独創性が相まって、この小説を巡っては、これまで作者の自伝的要素を読み込むなど様々な解釈がなされてきた。なかでも、Ellen Moers が“Female Gothic”の中で作者自身の人生が反映されているとする議論はあまりにも有名であるため、作品について論じる批評家たちの多くがモアーズの論考を引き合いに出すこととなった。モアーズは正式の結婚によらない立て続けの妊娠と出産、そして相次ぐ乳児の死など、執筆当時に安定した状況になかったメアリーの複雑な感情を、この小説に読みこむことができるとする。¹

確かに、メアリーの描き出す物語には彼女自身の人生と重なり合うところが多くあるように見え、モアーズは『フランケンシュタイン』が「出産以前」や「出産そのもの」ではなく、「産後のトラウマ」を描いている点に、女性作家にしか成し得ない特質を見出している (Moers 93)。このように、メアリー自身の関心は、とりわけ再生産に寄せられており、社会から決して受け入れられることのない怪物を創造する行為からは、出産にまつわるメアリーの屈曲した思いを推測することができるだろう。さらに、メアリーはこの物語の大きなテーマである生命創造という行為を、男性の領域である科学の中で行わせることにより、女性の領域でしかなし得ないはずの再生産を、Victor Frankenstein という男性に達成させた。ヴィクターの怪物創造に出産の様相を帯びさせることで、両者の関係は創造主と被創造物であるだけでなく、親子関係のメタファーとしても読むことができる。本論では、エレン・

モアーズの論文を踏まえたうえで、とりわけ「家族」という枠組みに目を向けることで、この小説に描き出される「家族」について再考したい。さらに、擬似家族関係ともいえるヴィクターと怪物の関わりを通して前景化され、あるいは露呈される、既存の家族制度が孕む欺瞞性についても考察する。

2. 父親への反発と母親への固着

「わたしほど幸せな子供時代を送った人間もいないでしょう。父母はまさしく親切と寛容の精神にあふれていました」(45)。² このように、度々示されるヴィクターによる幸せな少年時代の語りは、彼自身が後に、研究の末創り出す怪物の生活と対照的なものである。一方は愛情あふれる家庭の中で、そしてもう一方は、ひとりきりで育ったとも言えるほど愛情とは無縁な環境の中での成長を強いられている。Barbara Johnson は、二人が「対照的な育てられ方 (two antithetical modes of parenting)」をしているにも関わらず、このふたつの人生が物語の進展に伴って「区別不能 (indistinguishable)」になっていくことを指摘している (Johnson 145)。確かに、この作品における両者の関係について、互いが互いの分身であるとみなす解釈もなされているように、2人の人生には多くの共通点がある。例えば、両者が社会から隔絶していること、愛着を抱く対象への過度の執着がみられること、家族的関係からの疎外を感じていることなどが挙げられる。全く違う境遇で成長したはずのふたりが似通った最後を迎え「区別不能」になってしまうのだ。その歪みを登場人物たちに生じさせてしまう親子関係について、まず考察していくことにしたい。

主要な男性登場人物の、父親たちに対する態度に目を向けると、彼らにある共通点に気づくことが出来る。それは、彼らがほとんどの場合、父親の意に染まらない、あるいは期待を裏切るような行動を選ぶということである。まず、物語全体の枠組みを成す語り手である Walton はまさしく北極への航路発見へと乗り出している最中であるが、この「船旅の生活」(29)は、父親の遺言で禁じられた行為である。ヴィクターも、自身が興味を持ったコル

ネリウス・アグリッパの理論を父親から「がらくた」(46)と呼ばれ、「そんなことで時間を無駄にするな」とはっきりと否定されたにも関わらず、一層熱心に研究書を読み漁る。そしてこの熱意は、後に結果として家族を殺す怪物を創造させることになる。又、ヴィクターの親友である Henry は、父親の「学問嫌い」(63)を押し切り大学へ入学し、De Lacey 一家の長男 Felix は、自身の軽率さ故に、何不自由なく暮らしていた父親と妹を国外追放という身分に貶めることになる。このように、登場する男性、とりわけ一家の跡継ぎとなる長男たちは皆一様に、父の教え、期待に背いている。

一方、この小説において、母、もしくは母となりうる女性の存在は極めて希薄である。Anne K. Mellor が、ヴィクターの行為を「再生産という自然な女性の役割を科学によって奪い、更に女の怪物を作り出すことを拒んでいる」と指摘し、この小説の恐ろしさが女性を排除した「男性だけの社会」にある (Mellor 355) と考察した通り、女性の存在はあくまでも周縁に追いやられている。女性の主な登場人物といえば、フランケンシュタイン家の母親である Caroline、ヴィクターとは兄弟同然に育てられた捨て子の (初版ではいとこの) Elizabeth、実の母に蔑ろにされ、お手伝いとしてフランケンシュタイン家で働く Justine とその母、さらに怪物の語りのなかで登場するド・ラセー一家の娘 Agatha と息子の婚約者となる Safie、そしてサフィーの母、最後にウォルトンの姉である Mrs. Saville の 8 人である。決して数として少ない訳ではないにもかかわらず、そのうちの 3 人、ジュスティーンの母、サフィーの母、サヴィル夫人は最後まで姿を見せず、読者には伝聞としての情報しか与えられない。更にカロリーヌは幼い子どもたちを残して物語序盤早々に亡くなってしまふ。残されるのは、自身の家庭をまだ持っていない未婚の女性たちだけである。こうした母親の状況には、作者の意図を読み取ることが可能だろう。この点について、さらに母と息子との関係分析を通して考察することにしたい。

父親に反対された研究を、後に得た知識と組み合わせることでついに生命創造に成功したヴィクターは、創り出した創造物のあまりの外見の醜さに直

面することが出来ず、眠ってしまう。その間に彼が見る夢、いうなれば、完成した怪物をみたことで引き起こされた夢にまず現れるのは、嫌悪ではなく愛情を抱いているはずの婚約者エリザベスの姿である。

I thought I saw Elizabeth, in the bloom of health, walking in the streets of Ingolstadt. Delighted and surprised, I embraced her; but as I imprinted the first kiss on her lips, they became livid with the hue of death; her features appeared to change, and I thought that I held the corpse of my dead mother in my arms; a shroud enveloped her form, and I saw the grave-worms crawling in the folds of the flannel. (61)

居るはずのないインゴルシュタットにエリザベスの姿を見つけたヴィクターは彼女の元へと駆け寄り、抱きしめキスをする。しかし、唇へのキスの「刻印 (imprint)」(61) をきっかけに、エリザベスの姿は死んだ母親の姿へと変わる。

後にエリザベスが怪物に殺されることを踏まえ、この死んだ母親への変化を、これからエリザベスに訪れる死を暗示した「予言的な夢」(Homans 136) であると位置づける Margaret Homans の解釈は十分納得のいくものである。やはり、死んだ母親を、死を象徴するものとして描き出しているとなればエリザベスから死んだ母親へという変化は不幸なエリザベスの未来を暗示しているのかもしれない。しかしながら、その変化がエリザベスへ最初に接触する抱擁ではなく、口づけによって引き起こされるという描写から、口づけという行為自体にも意味があるように思われる。呼吸の停止した人に対して人為的に再び空気を送り込もうとする人工呼吸が“the kiss of life”と呼ばれるように、口づけはそれまでにヴィクターが行っていた科学的な作業、怪物に命を吹き込む行為の置き換えであると言えるだろう。そして、ここで命を与えられようとしているのは、エリザベスから姿を変えた母親であり、ヴィクターの怪物創造が、再び母親を取り戻そうとする行為であることが分かる。ここにはヴィクターの近親相姦的願望を見いだすことが可能であり、

また、死んでいる母親への屍姦症的な思いも見取れる。

夢から覚めたヴィクターが次に目にするのは、生命を与えることに成功した現実の怪物である。夢の中の母親から現実に関り出した怪物への移行は、死んだ母親と現実に関り出した怪物との間の関係性を示しているようである。David Collins が、ヴィクターが父的な世界に属していくために、母的な身体をあきらめ、代理の女性（エリザベス）を求めるというエディプス・コンプレックスを克服し成長するという通常の道筋ではなく、怪物を創り出すことで母的な身体の回復を試みている（Collins 248）、と指摘する通り、そこには、断念すべき母的な身体を手放すことができず、それに固着し、怪物を創り出すことによって、そこに回帰しようとするヴィクターの姿を見出すことができる。

こうした母親固着は、フランケンシュタイン家の末っ子 William を殺した後、ジュスティーヌを犯罪者へと仕立てるのに使用された母親カロリーヌの肖像画をめぐる場面を通して、怪物の中にも見出すことが出来る。ウィリアムを殺した後、カロリーヌの像に魅入る怪物の視線は、紛れもなく母的な存在に向けられたものであり、弟が殺され、ジュネーヴの自宅に戻ったヴィクターの「母の肖像を見つめ」(76) の視線とも呼応している。カロリーヌの像に欲望の視線を向ける怪物は、「こういう美しい者たちがあたえてくれる喜びを、おれは永久に奪われているのだと思い出した (I remembered that I was for ever deprived of the delights that such beautiful creatures could bestow; ...)」(127) と語り、怒りを爆発させる。怪物は、すぐれた言語能力を身につけながら、社会から受け入れられないその醜い外見ゆえに、父的審級である象徴界に進むことが出来ず、母的な想像界に強制的に留め置かれるのだ。それにも関わらず、そもそもヴィクター一人によって創造され、生物学的母親を持たない怪物にとって、その喪失は補完されることさえ叶わない。怪物のこうした母的な存在への欲望は、ヴィクターのそれと共通のものであると言えるだろう。

このように、母親たちの存在は希薄に描かれてはいるが、この物語の大き

なテーマである怪物創造自体、母親喪失を補完しようとする退行的な欲望充足の行為であり、その根底には常に母親への強い欲求が窺える。一見、希薄に描かれているかに見える女性たちは、実は父親以上に重要な役割を担っていることが見えてくる。母親固着から生み出された怪物が端的に示しているように、母親への欲望は男性たちに強い影響力を持っているのだ。

3. 機能不全家族

怪物創造の行為が示しているように、母親を断念出来ないヴィクターは、結果的に母親代理となるはずのエリザベスとの結婚を先送りする。それは、エリザベスへの愛を語る一方で、全く相反する行動を取り続けるという、ヴィクターの矛盾した姿に表れている。

許嫁であるエリザベスとの結婚を、研究や怪物を言い訳に延期し続けるヴィクターの態度は、父親 Alphonse やエリザベスに「ほかに女性がいるのではないか」(133) (161) と疑わせるほどである。エリザベスとの愛情よりも怪物を作り出すことに情熱を向けるヴィクターは、結婚を拒否することにより、子孫の再生産という長男としての役目をも拒むことになる。そして、それを裏付けるように実行されるのが、怪物によるエリザベス殺害である。エリザベス殺害によって完全に再生産の可能性を断ち切られたヴィクターは嘆き悲しむが、そもそも “I shall be with you on your wedding-night” (146) と既に怪物によってその登場を予告されていたにもかかわらず、エリザベスを一人部屋に残すことにより、怪物に殺人可能な状況を与えてしまう。この作為的とも見えるヴィクターの行動には、エリザベスや未来の子を期待する家族に対する彼のアンビバレントな思いが反映しているように見える。このとき怪物は、殺人という行為を通して、ヴィクターの抱える家族への違和感を読者に拡大して見せているように思えるのだ。更に、婚礼の日エリザベスに取って代わろうとするかのような怪物の言葉は、怪物のクイアな欲望を表明しているかのようでもある。いずれにせよ、2人の繋がり創造主と被創造物、父と子というだけではなく様々な因子を内包しているといえるだ

ろう。少なくとも明らかなことは、ヴィクターと怪物が互いに互いの再生産を阻む存在であるということである。

エリザベスの死は、ヴィクターの再生産の可能性を阻んだ事件ではあるが、その殺人もまた、別の再生産の可能性を阻んだことによって引き起こされたものだ。つまり、ヴィクターによる女の怪物殺害である。怪物はヴィクターに「おれの性と違う、同じくらいおぞましい生き物」(129)を創ってほしいと懇願するが、女の怪物はその完成間近に、ヴィクターによって「ずたずたにひきちぎ」(145)られてしまう。この破壊行為についてヴィクターは以下のように理由を語る。

Even if they were to leave Europe, and inhabit the deserts of the new world, yet one of the first results of those sympathies for which the dæmon thirsted would be children, and a race of devils would be propagated upon the earth, who might make the very existence of the species of man a condition precarious and full of terror. (144)

この語りから分かるように、ヴィクターが恐れているのは、新しい怪物を作り出す事によって怪物が2人になってしまうということではなく、それによってもたらされるだろう「子供たち (children)」や「悪魔の一族 (a race of devils)」の存在である。やはり、ヴィクターの欲望のベクトルは常に、再生産を回避する方向へと向けられているのだ。さらに、その欲望は再生産の場である家庭から再生産を排除し、実験室へとその場を置き換えるという歪んだ執着をもみせている。ただ再生産を回避するだけではなく、家庭からそれを排除しようとするヴィクターのこの欲望を通して、読者は、彼が抱く幸せな家族像への違和感をより一層印象付けられることになる。

怪物創造を可能にしたヴィクターの実験室が Gilbert と Gubar によって「子宮」(235)と称されるのは、³ 当然のことといえるだろう。加えて、そこで行われていた実験は、研究という一見社会的行為であるように見えるが、実際には、先に見たように常に母親固着の延長線上にある、プライベートな

領域での退行的な行為である。事実、「未完に終わるかもしれない」(58) 作業を「わたしの試みが将来の成功のせめて礎となる希望もわきます (I was encouraged to hope my present attempts would at least lay the foundations of future success)」(58) と、研究に邁進するヴィクターは、後の世代に伝えるべき研究結果である生命の源に関する情報や怪物創造の詳細な方法に関して語ることはない。ただ読者に示されるのは、持ち寄った材料と共に、実験室に閉じこもった科学者が、数ヶ月後に新たな生命体を創り出し実験室から出てくるとのことだけである。子宮的なイメージを付与された実験室での作業によって、ヴィクターは女性だけに与えられた特権である妊娠、出産という行為を、女性の介入なしに成し遂げることに成功する。ヴィクターによる女性なしに行われたこうした怪物創造（出産）は、既存の異性愛を基本にして成り立つ家族制度を逸脱する行為に他ならず、そうであれば、このように生み出された怪物が既存の家族制度を懐疑させ、再生産を阻害するものとして表象されているのも頷ける。

4. メアリーと「おぞましいわが子」

出産を巡るこの物語をメアリーは1831年版の序文の中で「おぞましいわが子 (My hideous progeny)」(25) と呼んでいる。しかしながらメアリーにとって「おぞましいわが子」であるこの小説は、1818年の発売当初は Percy Bysshe Shelley によって書かれた序文と共に、生み出されることとなった。この序文の中でパーシーは、この小説を「家庭の愛情の好ましさを示す (to the exhibition of the amiableness of domestic affection)」(26) と述べているが、これまで見てきたようにその内容が「家庭の愛情の好ましさ」を示すものでないということは明白である。

そもそも、この小説は、偉大な両親の下に生まれたメアリーがその才能を受け継いでいるはずであると考えたパーシーの要請によって、いわば素質を測る材料として、完成されたものである。13年後にメアリーによって書き換えられることとなる序文の中で、アイディアを思いつかない「からっぽ

(blank)」(23) の状態を「作家の最大の不幸 (the greatest misery of authorship)」と嘆くと共に、パーシーからの「お話は考えついたかい (have you thought of a story?)」という言葉にどれだけ苦しめられたかを記しているほどである。このように苦勞して書き上げた作品であるにも関わらず、結果的に夫の序文が付けられていることから分かるように、メアリーは書くことを勧められ励まされると同時に、小説を書くという社会的行為への夫からの介入を強く受けていた事が分かる。この相反する要請に対するメアリーの戸惑いや反発、そして強いられることへの否定的な思いは、夫の死後に書き換えた31年版の序文において、「ひとつの事件も、ほとんどひとつながりの感情も夫の提案に負うことはなかった (I certainly did not owe the suggestion of one incident, nor scarcely of one train of feeling, to my husband)」(24) ということを明確にしていることから窺える。また、そこからは、家族愛という名の下に行われる支配と、その欺瞞性をメアリーがいかに感じていたかに気づかされる。こうした屈折した思いが、メアリーを怪物創造による家族破壊の物語を生み出させたのかもしれないし、怪物の存在こそが、その存続のために、個人に強制を強いる家族制度そのものの欺瞞性を暴いて見せていると言えるのかもしれない。

「この小説は、完璧な家族の絆などというものはそもそも存在するのかと問いかけている」(Bronfen 38)、と Elizabeth Bronfen は言う。これは、メアリーとパーシーが常に尊敬の対象であったメアリーの両親、William Godwin と Mary Wollstonecraft の著作を意図的に「誤読」したものであると指摘する Harold Bloom の論考に関連した議論の中でなされたものである。⁴ 事実、メアリーの実生活において、彼女を取り巻く環境はメアリー自身のパーシーとの不倫関係だけではなく、非常に複雑なものであった。メアリーの父親であるアナーキストのゴドウィンは彼の著作の中で法を否定し結婚に関しても自由恋愛を推奨していたし、母親のウルストンクラフトは結婚することなく、メアリーの異父姉妹にあたるファニーを出産している。一方で法によらない生活の必要性を掲げていたはずの父親は、実生活においてはメア

リーを身ごもったウルストンクラフトと結婚し、娘のメアリーが妻のいるパーシーと交際するのも反対する。彼がウルストンクラフトと結婚するにあたり友人 Mr. Wedgwood に書いた手紙には、「結婚に関する自身の主張が、ヨーロッパの国々での実生活においては間違いであった」(Marshall 10) とその非を認めている。このように結婚や家族を巡る定義に関して様々な意見に振り回されたメアリーが既存の家族制度に対して懐疑的な思いを持っていたのも頷ける。そんな状況下で、家族に自分の存在を示す方法としてメアリーに与えられたのは書くという行為だったのかもしれない。著名な作者である両親、夫、友人たちのなかで重視されるのは、生み出したものであり、素晴らしい大作を完成させる以外に自身の価値を示す方法はないのだ。

エレン・モアーズは、メアリーの出産経験を踏まえた「産後のトラウマ」、そして家族関係の複雑さを含む伝記的な背景をこの作品の中に読み込んでいる。確かに、メアリーは、自身の誕生と引き換えに母親を亡くし、駆け落ちをしたために父親には勘当され、未婚のまま生んだ子どもも幼くして亡くしてしまうなど、その出産と錯綜した家族関係は、自伝的な読みを誘ってしまうのに十分である。そんな不安定な状況でメアリーが生み出したのが怪物創造の物語であり、母親が介入しない出産という、通常の異性愛による再生産ぬきの、擬似家族の物語である。それは、この作品が神の領域を犯そうとした人間への罰という寓話として解釈される以上に、もっと身近な「家族」というもののあり方について問いかけているようである。メアリーにとってこの作品は家族の絆を示すものであると同時にやはり、「おぞましい」ものをめぐるのものである。パーシーが女性の書きものとして想定した「家庭の愛情」を示すといった類の小説とは違う、むしろそれを覆すような小説をメアリーは書いて見せている。この小説が提示するのは「家庭の愛情の好ましき」という心地良いものではなく、むしろ「家族のおぞましき」そのものを描いているようにみえるのだ。

Peter Brooks は「怪物とは何か」という論文の中で、怪物が担う豊かな意味に言及し「意味作用の過剰」(218) と位置づけている。もちろん怪物は

様々な意味を担いうるものではあるが、家族という観点からこの小説を捉えるとき、怪物は家族のおぞましさを意味しているように見えてくる。多義性を含む怪物の意味を、そしてテキストの意味を一義的に還元することは出来ないが、シニフィアンの連鎖の中で、怪物を、家族のおぞましさを象徴する存在として捉えることもまた可能なことのように思われる。

注

本稿は日本英文学会関西支部第8回大会（2013年12月22日）において口頭発表した原稿を加筆・訂正したものである。

- 1 この点については、Moers の *Literary Women* の Part I、第5章（91-97）を参照のこと。
- 2 本稿では、第三版（1831）の Bedford 版 *Frankenstein* を使用。第三版が Mary Shelly の序文と共に発表されたこと、そして、“And now, once again, I bid my hideous progeny go forth and prosper”（25）と、メアリー自身がこの版による新たな再出発を望んでいることから、本稿では第三版を使用することにした。尚、日本語訳については森下弓子訳を引用、もしくは変更を加えて使用した。
- 3 Gilbert と Gubar は Victor が纏う女性性について指摘し、彼の仕事を「支配的な屋根裏の子宮（commanding attic womb）」（235）と呼んだ。詳しくは、*The Madwoman in the Attic* の Part III、第7章（213-247）を参照のこと。
- 4 Elizabeth Bronfen はその考察において、Harold Bloom の説を本人が意図したよりもはるかに文字通りの意味で引用した（Bronfen 17）と記している。詳しくは、*Frankenstein, Creation and Monstrosity* の第1章（16-38）を参照のこと。

参考文献

- Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence*. New York: Oxford UP, 1973.
- Bronfen, Elisabeth. “Rewriting the Family: Mary Shelley’s ‘Frankenstein’ in its Biographical/Textual Context.” Ed. Stephen Bann. *Frankenstein, Creation and Monstrosity*. London: Reakiton Books, 1994.
- Brooks, Peter. *Body Work: Objects of Desire in Modern Narrative*. Cambridge, Massachusetts and London: Harvard UP, 1993.
- Collings, David. “The Monster and the Imaginary Mother: A Lacanian Reading of *Frankenstein*.” Ed. Johanna M. Smith. *Frankenstein*. Boston: Bedford/St. Martin’s, 1992.
- Gilbert, Sandra M and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic*. New Haven and London: Yale UP, 1979.
- Mellor, Anne K. “Possessing Nature: The Female in *Frankenstein*.” *Frankenstein*. 2nd ed. Ed. J. Paul Hunter. New York: W. W. Norton & Company, 2012.

- Moers, Ellen. *Literary Women*. New York: Oxford UP, 1985. (『女性と文学』青山誠子訳、研究社出版 1978年。)
- Homans, Margaret. "Bearing Demons: *Frankenstein's* Circumvention of the Maternal." Ed. Harold Bloom. *Mary Shelley's Frankenstein*. New York and Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1987.
- Johnson, Barbara. *A World of Difference*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1987. (『差異の世界』大橋洋一、青山恵子、利根川真紀訳、紀伊国屋書店 1990年。)
- Marshall, Florence A Thomas. *The Life & Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. London: Richard Bentley & Son, 1889.
- Shelley, Mary. *Frankenstein*. 2nd ed. Ed. Johanna M. Smith. Boston and New York: Bedford/St. Martin's, 2000. (『フランケンシュタイン』森下弓子訳、東京創元社 1984年。)
- Shelley, Mary. *Frankenstein*. 2nd ed. Ed. J. Paul Hunter. New York and London: W. W. Norton & Company, 2012.
- フロイト, ジークムント『エロス論集』中山元編訳、筑摩書房 1997年。